

名大郷土研究会OB会 関ヶ原踏査会

1. スケジュール

【往路】関ヶ原駅（11:25着）→ レストラン伊吹（11:40）昼食→ 13:00 下記①にて現地ガイドさんと合流

【踏査】①→⑩ 踏査

【帰路】関ヶ原駅（16:30着） 関ヶ原駅（16:51発）→ 岐阜駅（17:22）
駅構内の昭和食堂にて懇親会（17:30～2時間）

2. 踏査行程

①歴史民俗資料館（13:00～13:30）

関ヶ原合戦屏風図やジオラマで合戦の流れを事前学習

②家康最後陣跡

家康が最初陣地である桃配山（関ヶ原の東の入口にある高さ104mの山）から、合戦当日の午前11時頃に移動し、合戦が終わるまで指揮をした場所。また戦いが終わってからは、討ち取ってきた敵の首級を実検した所でもある。

③黒田・竹中陣跡（岡山烽火場）

豊臣恩顧の武将であった竹中重門は、犬山城にいたが、岐阜城の落城後に東軍についた。合戦時重門は黒田長政とともに岡山（丸山ともいう）に陣取り、戦機を見て烽火を上げた。

二人の関係といえば、長政と重門は少年時代の1年間、隣村の岩手において共に過ごした旧知の間柄だったというから大変興味深い。しかも、秀吉が恐れた男黒田官兵衛（如水）と頼りにしていた男竹中半兵衛の両息子が、共にここで奇しくも陣を敷いたのである。ここは、三成が陣を敷いた笹尾山とは約1,200mしか離れておらず、当時の戦がどんなものだったかがわかる。

④決戦地

三成の陣地である笹尾山の前に、今は田園の広がる中ほどに決戦地の大きな碑が建てられている。

戦況は、午前中は東軍不利の展開であったが、正午過ぎに西軍として参加していた松尾山の小早川秀秋と脇坂、朽木、小川、赤座の4隊が友軍の大谷吉継を攻撃するというまさかの内応により、一挙に東軍が優勢となり、西軍は浮足立った。はじめに小西行長、続いて宇喜多秀家が敗走。三成の軍も最後までよく戦ったが、ついに江州方面に敗退していった。

⑤石田三成陣跡（笹尾山）

南西方向に北国街道が走る、軍事上重要な場所。三成は手勢約6,000の兵を配し、二重に囲った竹矢来の前面に島左近、中間に蒲生郷舎を配置し自らは山頂で指揮をとっていた。

東軍緒將の功名の手段として三成の首級を狙った攻撃は凄まじかった。しかし、島左近、蒲生郷舎らが東軍を幾度も攻撃し、午前中は西軍優勢のうちに戦いは展開していた。ところが正午過ぎ、小早川と4隊の内応によって形勢は逆転し、西軍各隊は防ぎきれずに崩れていった。石田隊の猛将・勇卒の多くも討ち死にし、三成は再起を誓って伊吹山中に逃れた。そして母の菩提寺にたどり着いたのである。その後古橋村に潜伏し、三成自身の意思で9月21日に田中吉政の手により捕えられたという。

10月1日、三成は小西、安国寺とともに京都六条河原で斬首に処された後、遺体は大徳寺三玄院に葬られた。

⑥島津義弘陣跡

北国街道を押さえるため、島津義弘は約800の兵をもって陣を敷いた。笹尾山の三成の陣からは約800m南で、西軍のほぼ中央部に位置している。義弘は、この戦いで鉄砲を巧妙に使ったということで有名。

しかし、小早川の寝返りで西軍は敗色が濃くなり、義弘隊も東軍に囲まれてしまった。義弘は残兵2~300人とともに、前方数百mの家康の陣前をしゃにむに突破して、関ヶ原南端から伊勢街道へ脱出、幾多の苦難を乗り越えて帰国した。

この話は、関ヶ原合戦の話の中でも、小早川の寝返りに次ぐ有名な話である。

⑦開戦地

当日の午前8時頃、東軍の先陣福島正則が、松平・井伊隊の旗の動きを見るや、先陣の遅れを取られてなるものかと、宇喜多隊に攻撃を開始した。

開戦地の大きな碑が建っているが、元々は開戦地のほぼ中央東よりにあったが、昭和56年に約300m北側に移動している。

⑧小西行長陣跡

行長は6,000の兵を率いて三成の挙兵に参加した。開戦と同時に北天満屋の陣地から烽火を上げて味方に開戦の合図をした。しかし午後になって「大谷敗れる」の報に接すると、行長はすっかり戦意を喪失し、島津義弘の陣の後ろから山越えて揖斐郡の春日方面へ敗走した。しかし9月19日に自首し、10月1日に三成と共に大阪堺、京の町を引き回され六条河原で斬首された。

⑨宇喜多秀家陣跡

開戦と同時に、17,000という西軍の主力部隊であった宇喜多隊に、東軍福島隊が攻め込んできて、かなり激しい戦いがくり広げた。まだ無名の宮本武蔵や塙(ばん) 団右衛門が奮戦したのもこのあたりだったらしい。宇喜多も敗走して山中

をさ迷った揚げ句美濃池田郡白樫村（揖斐郡揖斐川町）で匿われ、ひそかに島津氏を頼って薩摩へ下った。

⑩東首塚

家康の命で、合戦直後に関ヶ原の領主竹中重門が実検の首級を葬った塚。

昭和6年3月に文部省が史跡として認定した時、整地をして石柵や標柱などを建てた。更に昭和17年に名古屋市東区布池町護国院の旧山王権現社の朱塗の本殿と唐門が移築され、それが東西両軍の戦没者の供養堂となっている。

3. 関ヶ原合戦

（合戦までの経緯）

①合戦序曲 秀吉の死

天正18年（1590年）、小田原の北条氏を征服して全国の平定を終えた秀吉は、朝鮮を征服しようとしたが、その計画半ばの慶長3年（1598年）8月18日に62歳の生涯を閉じた。

②家康の動向

関ヶ原合戦の発端は、家康の会津、上杉景勝の征討だとされている。秀吉の死にともない、景勝は慶長3年9月に上洛したが翌4年8月に治国を理由に帰国してしまった。口実のできた家康は、奉行等が止めるのを振り切って会津征伐を発表。慶長5年6月、家康は大坂を出発、伏見城、三河吉田を經由して江戸城に入ったが、西変の急報が届いた。

③三成の挙兵

三成は家康が会津へ向かったことを知り、豊臣家安泰のためには家康を討つべしと決心し、大谷吉継を誘い、増田長盛や長束正家と謀って家康の罪を訴え、西国の諸將に檄を飛ばして兵を集めた。この檄に応じて集まった主な諸将はつぎのとおり。毛利輝元、毛利秀元、吉田広家、宇喜多秀家、大谷吉継、平塚為広、小早川秀秋、小西行長、島津義弘、長曾我部盛親、長束正家、脇坂安治 他総勢9万余人
三成勢は8月に伏見城を落とし、東海、中山、北陸の三道から家康を追って、景勝とともに家康を挟み撃ちにする計画をたて活動を開始した。

④東軍は西へ

上記西変を聞きながらも東へ兵を進めていた家康は同年7月に下野の国小山で前進を停止し、結城秀康（家康の次男）等を残し、他の全軍は東海、中山の両道を西へ進むことを決めた。

⑤岐阜城の落城

豊臣恩顧の諸將、福島正則、池田輝政は家康軍に就き、自分たちの決意を見せるた

めにも岐阜城を攻略すべきだと決議し、8月に岐阜城を攻撃し秀信は降伏した。岐阜城の援軍として呂久川付近まで出ていた三成勢は戦うことなく大垣城へ引き上げてしまった。その後、東軍緒将は大垣赤坂の高地岡山に陣取り、家康の到着を待っていた。岐阜城落城の吉報を得た家康は9月1日に江戸を出発、13日に岐阜、14日正午には赤坂（岡山）に着陣した。

⑥西軍関ヶ原に集結

大垣城中での三成、義弘、秀家、行長等の軍議で、関ヶ原の地の利を熟知していた三成は、関ヶ原の要害地まで進んで、大谷、小早川の軍と合流し、盆地内で迎撃作戦を行うことを自ら決定したと言われる。そして、14日午後7時頃、守備軍として兵7,500をつけた福原長堯を大垣城に残して、雨の降りしきるなか全軍を南宮山の南を迂回して関ヶ原へ進んで、次のような陣形を取った。

笹尾山 石田三成（島左近らを合わせて6,000人）

小池 島津義弘（800人）

北天満山 小西行長（6,000人）

南天満山 宇喜多秀家（17,000人）

宮上 大谷吉継（1,500人）

松尾山麓 脇坂安治（1,000人）、朽木元綱（600人）、
小川裕忠（2,100人） 赤座直保（600人）

松尾山 小早川秀秋（15,700人）

南宮山 毛利等軍団（16,000人）

以上、盆地周辺に布陣した西軍は総勢約8万2,000人であった。

⑦東軍の布陣

大垣城から西軍の主力が関ヶ原方面に向かったという報告を受けた家康は、堀尾忠氏を留守隊として、大垣赤坂の岡山にとどまらせ、他に大垣城押えの隊を配置し、直ちに中山道を進軍させた。そして15日夜明けには、東軍主力は下記のように前進した。総勢は8万9,000人。

中山道（松尾） 福島正則（6,000人）

（芝井） 藤堂高虎（2,500人） 京極高知

北国街道（岡山） 黒田長政（5,400人） 竹中重門

細川忠興（5,100人） 加藤嘉明（3,000人）

家康陣営前面 松平忠吉（3,000人） 井伊直政（3,600人）

本田忠勝（軍監）（500人）

本営 徳川家康（30,000人）

南宮山押え（野上） 山内一豊（2,100人） 有馬豊

（垂井） 浅野幸長（6,500人） 池田輝政（4,600人）

(合戦ドキュメント)

慶長5年9月15日(新暦 10月21日頃)、いよいよ東西雌雄を決する時がきた。その日、夜が明けて夜来の雨は上がったものの、霧が濃く前方がはっきり見えなかった。午前8時頃になって、わずかに視界が開けたので、井伊・松平の一隊が福島の家臣可児才蔵に物見と偽り、宇喜多の隊に発砲し、島津隊に向かった。

福島隊は、先鋒の誇りを奪われてはならないと、直ちに南側面から宇喜多の隊に対して攻撃を開始した。それを見た黒田長政は岡山(丸山)で、また西軍の小西行長は北天満山で、烽火を上げて開戦の合図を送った。

そしてついに開戦。まず東軍右翼の諸隊、黒田、細川、加藤、田中等は、我先に石田の隊へ突撃。島津の隊へは、井伊、本多が肉迫。小西の隊へは寺沢、戸川等が。宇喜多隊へは福島、筒井等が。大谷、平塚の隊へは、藤堂、京極等が、それぞれ攻撃した。

午前中は西軍が有利な戦いで東軍を圧倒していた。家康は、はじめ桃配山で指揮を取っていたが、硝煙が立ち込めていることと、距離が遠くて詳しい戦況が分からないことから、午前10時過ぎから少しずつ軍を進めて11時頃には関ヶ原の中央部(陣場野)に陣を置き、全軍の指揮をした。

しかし、午前中は東軍の兵士の士気が上がらず戦況は不利な様相を呈していた。家康は松尾山の小早川秀秋とは、かねてから内応の約束があったので、前日奥平貞治を使者に出して、頃合いを見て裏切らせるよう指示をしていた。しかしながら、秀秋は一向に動こうとしない。家康は合図をしたり、使いを出したりしていたが、秀秋は依然として傍観しているのみであった。もう待てないとばかり、家康は、決心を促すために松尾山に向けて催促の大鉄砲を打ち込んだのである。

驚いた秀秋は衝撃の余り、遂に裏切りを決意し、山を下り大谷隊を突いた。突かれた大谷は、松尾山の小早川には予てから油断することなく疑いを持って、十分備えていた。そのため、小早川に突かれても二度、三度と撃退することができた。

しかし、新たに南側から、寝返った脇坂、赤座、朽木、小川に攻めこまれ、さらに東側から藤堂、京極。背面からは小早川が攻撃してきたので、ついに大谷の隊は敗れて、吉継は無念の自害を遂げた。

これがきっかけとなり、西軍の士気は極度に低下し、小西も敗れ、宇喜多が崩れ、北の山を越えて書く将兵らは敗退して行った。残るは石田と島津の二隊だけとなった。石田の隊は死力を尽くして最後まで善戦したが、衆寡的せず江州方面へと敗走した。

最後の一隊となった島津隊は、幾重にも取り囲まれて、とても生きては帰れないと、残兵二、三百名を集めて、前方数百メートルにいる家康と決戦しようとした。しかし、甥の島津豊久らに諷められて家康の陣前を強行突破、烏(う)頭坂方面へ脱出した。いわゆる「島津の退き口」で、全台未聞の敵前正面突破である。

午後4時、兵士が退去した激戦地には再び雨が降ってきた。残された死体は8,000人と

も30,000人とも言われ、記録は残されていない。

その後9月19日に小西行長、その3日後に三成が捕えられ、京都六条河原で斬首された。

(以上 関ヶ原町 発行 関ヶ原町歴史民俗資料館せきがはら史跡ガイド
編集「関ヶ原 名所・古跡」他 より抜粋)

小早川秀秋は本当に「裏切り者」だったのか？

・・・秀秋は秀吉の正室、北政所の兄の子。4歳の時に羽柴秀吉の養子になって幼少より北政所によって育てられた。11歳で権中納言となり、関白の豊臣秀次に次ぐ、豊臣家の継承権保持者と目されていた。ところが、秀頼が誕生したことにより、彼の運命は暗転した。秀頼にとって彼はジャマ者。自害を命じられた秀次ほど酷くはないが、小早川家に養子に出されてしまった。朝鮮出兵では勇敢果敢に戦うが、わけの分からぬ理由によって今度は領地を大幅に削られ、越前12万石に左遷。秀吉がもう少し長生きしていたら、もっと酷い仕打ちを受けていた可能性もあった。そんな彼に救いの手を差し伸べたのが徳川家康で、彼の計らいによって、秀秋は筑前の領地を何とか回復できたのである。

そんな秀秋だから「太閤さまのご恩」などと言われても「何をバカな」という気持ちだったと思われる。実際に彼は石田三成の挙兵当初から、家康に心を寄せていたらしい。不本意ながら伏見城の攻略に加わったあとは、病と称して西軍の軍事行動から離脱。小早川勢はしばらく近江の高宮(彦根市)にいて、関ヶ原合戦の1日前、9月14日に松尾山城に移動する。ここには西軍の伊藤盛正(大垣城主)がいたが、その部隊を追い払っての無理やりな着陣だった。

城郭研究家の中井均氏は次のように説いている。「小早川勢動く」の知らせは大垣城にいた三成を驚愕させた。秀秋が家康と通じている気配は濃厚である。松尾山城の秀秋と、赤坂(大垣市)に本営を置く家康に挟み撃ちされたら大垣城はたまらない。そこで三成はすぐに城を出て、関ヶ原に陣を移した。家康以下の東軍も、それを追って関ヶ原へと向かう。かくて翌15日、決戦の火蓋が切られる。

僕は、中井説は卓見であると思う。少なくとも十分検討に値する。もし、これが史実に近いのならば、秀秋は裏切り者などではない。彼は終始徳川方。そして三成も家康もそう認識していたからこそ、すぐさま行動を起こしたわけである・・・

(本郷和人著 「戦国武将の明暗」より抜粋)

以上 案内人 近藤 登